

かがみやまききょうのにしきえ

加賀見山旧錦絵

〔解説〕

天明二年（一七八二）江戸薩摩外記座初演。容楊黛（ようようたい）作。大名家のお家騒動を題材とした時代物です。「草履打」は実際に武家で起こった事件がもとになっています。お家乗っ取りの一味、局の岩藤（いわふじ）らは、その陰謀を知ってしまった町人出身の中老尾上（おのえ）を執拗に苛めます。草履打ちの辱めから自害してしまう尾上ですが、尾上に仕える女中お初が敵を討ち、お家騒動も解決となります。

〔草履打ちの段 あらすじ〕

町人の娘ながら重用される中老尾上を妬む岩藤は、町人出身ゆえに武芸の嗜みはなかりと、鶴ヶ岡八幡への代参の折に試合を仕掛けます。岩藤の苛めは更に度を増し、汚れた草履で尾上を打ち据えますが、なんとかその場を堪え忍んだ尾上は、その草履を懐に館への帰路につきます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

草履打ちの段

勇ましき、かしこき神の神諫め。折から告ぐる供廻り。

「いざ御立ち」

と夕ばえの、中老尾上先に立ち、多くの女中が取囲み、
対の帽子も一様に群れある鷺のごとくにて帰り申し
の鳥居前。

跡打見やり局岩藤

「ナント尾上殿、町人には珍しいあの善六、町人は賤
しいものとモ感心したいまの云ひ様、ヤ、コリヤほん
に此様へは差合であつたものホ、ホ、ホ、イヤナ二尾
上殿へ、こなさんの宿といふは金持なれど町人、仮親
しての御奉公。スリヤ今わしがいふたこと気に障りや
しませぬか」

と、味なところへ仕かける意地と、思へどわざとそら

さぬ顔。

「これはまた岩藤様の痛み入ります御挨拶。ナンノ私
が左様なこと。が仰つしやる通り親どもがお出入の縁
をもちまして、かやうな重い御奉公も有難い身の幸せ。
根が町人の私がこと、さぞや不束な事ばかりでござり
ましよ。この上とても岩藤様、はゞかりながらよい様
に、お指図たのみ上げます」

と柳ながしのしなやかに云廻したる利発さよ。

「ヲ、何ぢやえ、町人の娘御故たらはぬ事を指図して
くれいかえ、ホンニつべこべつべこべと薄い唇ぢやの
う、ナンノお前の御發明で私が指図受けさうな事かい
の。ついでぢやによつて云ひますが、こなさんの親御
といふはお屋敷のお金御用を勤めやるといふその用
達顔の高慢が鼻の先へぶらついてコレ、この顔の見え
るわいのく、イヤまた上の事いふぢやないが金の威

光はきついものぢや、この後とても、その金持顔やめ

にして下され、ヤ、ヤ、ヤ。お役向は御中老。この岩

藤は局役ヲ、お局役、お表ならば御用人格ぢやぞや。

女一通りは勿論、万二狼藉もの、また盗賊などが忍び

入る、サその時は役柄ぢや。女ながらも御前の固め、

討止める器量がなけりや勤らぬ御奉公ぢやが、定めて

長刀の一手も心得がござらうの。ヲ、そりやあの、誰

に稽古なさったぞ、イヤあの、そのお師匠様は何と云

ひますえ。コレ尾上殿々々、エ、マアこな人わいの、

人にばっかりもの云はせ此方は耳でも潰れたか」

と嚙つけられて尾上はただ赤らむ顔を押し隠し

「お恥しい事ながらその心掛けは」

「ないと云ふのか、アノ心掛けはない〜オホ、〜、

我折れ、そりやア、何ぢやぞえ、オ、ほんにこれが盗

人ぢやヲ、知行盗人ぢや禄盗人ぢや〜〜何とさ

うではあるまいか」

とまくしたてたる雑言を尾上は堪へ〜〜ても無念の

涙保ちかね歯を喰しぱり耐へいる。

「ムウ相手にならぬは岩藤が怖いのか。ヲ、怖しい筈

道理ぢや〜そんならモウこりや納めましょ〜、ド

レ〜帰りましょ〜、ほんにこなさんにか〜って、

ヲ、コレ見やしゃんせ、足袋も草履も砂まぶれになっ

たわいな。イヤナ尾上殿へ、ナントこの草履の汚れ

たのを拭いて下さんせぬか」

「アノ私に」

「オイノ」

「エ、」

「いやか〜」

「ぢやと申して、それがマア」

「それがマア、刃物汚しせうよりは幸ひなこの草履」

と、足に掛けたる土草履を、尾上が頭テウくく。

「これは」

とばかり奥女中、気の毒あまり立騒ぐを尾上は声かけ、

「ア、コレくく騒ぐまい女中達。岩藤様がこの尾上を御意見のための御打擲、わしや有難うてく、母様の御折檻と思ふてこの身の節々まで有難うて辱けない、ホ、くく、イヤ申し岩藤様、生みの親も及ばぬ御意見エ、有難う存じます。この上は随分と武芸をも心掛けて御奉公をいたしませう。また、この草履は私がためには御教訓のこの一品、申し請けて私が守り」

と、懐中したる心根は言はぬ色をやいひ草履、胸に納めし利発さよ。流石の岩藤呆れ顔

「何ぢや、その草履をわしに貫ふて守りに掛ける、ア、守りにや。テモ恐しい辛抱な人、意見した甲斐が

ある。以後をキツと嗜ましやれ。サ、行きませうく、

お暇申さう」

と替草履、心は後に尾上をば、にらみ廻して立帰る。

尾上は跡を打見やり耐へくしたため涙、一度にワツと伏し転び身も浮くばかり歎きしが数多の女中が立寄つて

「コレく申し尾上様、アノ憎体なお局の、気質は常からようご存じ、お腹立は御道理なれど、いつもの事ぢやと思召し必ずお気にさへられずと、まづく屋敷へお帰り」

と諫め立つれば泣くくも抱へ引締め立上がり、女心の一筋に、また思ひ出す口惜し涙。早寺々に暮れの鐘。あすは我が身も消えて行く。夕告げ鳥の泣くくも、打連れ屋形へ
(急ぎ行く。)